



『顔』

大柿 了一 [愛知県]

写実である表現の自由を制限するものではない真実を求めるものである。



『在るということ』

木村 順一 [愛知県]

抽象と具象は、同じ現象の中に立ち表れる。抽象と具象は別々にあるのではなく、1つの世界観を作っている。そうであってこそ「美」が生まれるのである。



『朔:時の旅人』

奥山 哲三 [北海道]

「朔」
60代半ばになって、改めて創作の奥深さをひしひしと感じています。10代のおわりに本格的に油絵を描きたいと思ってから今日まで、途切れそうになりながらも、どうにか描き続けてくることができました。振り返るとその道筋は、たどたどしくて、へたくそな線だけれども、その時々自分を表現するために手探りでつないできたことだけは確かです。ここ数年は、「目には見えなくても、確かに存在しているもの」を描きたくて『朔』(新月)をモチーフにした作品を描いています。見えないところで何かが終わる何かが始まる~そんな時間の不思議さを表現するために、日々、さ迷いながら描き続けています。



『Groove 1』

坂井 和子 [群馬県]

【音を描く】
絵と音楽は私にとってとても大切なものです。そしてテーマであるGroove感(高揚感)を言葉で表現することは難しいと感じています。長い間その魅力を引き出し、キャンバスに記するために、描いているのかもしれない。
今は無心に筆を走らせ、自分の感覚や気持ちの赴くまま過ごしています。強く主張する制作と楽しく遊び心のある作品も同様に私の一部であることも興味深いです。
そしていつか絵の中のウサギの視点から、まだ見ぬ新しい世界が広がっていくことを願っています。これからも研鑽を重ねていきたいと思っています。



『鴨の異変2023・B』

長田 昇 [愛知県]

三年間、コロナ騒動に振り回されて来ましたが、今後も様々な新たな変異で、深刻度が増すかも知れません。世界のリーダーは、その対策の為に知恵と予算を使うべきで有り、そのリーダーこそが、地球の真のリーダーに思います。狭い地球の中で、人間同士、国同士の戦争は退屈、無意味です。そんな矛盾を感じながら、作品制作。ピカソのゲルニカ精神に理解です。



『檸檬』

桜井 敬子 [神奈川県]

長いコロナとの生活が落ち着いてきた。自然界は、春と共に芽吹き力強く動き出しているのに、心の奥はコロナ前とは違う。庭のレモンの実にも勇気づけられ描いてみた日。自然界のパワーに反応できる気持ちだけは、持ち続けて前を向いて描いていきたい。



『Arousal B』

長田 文実香 [愛知県]

コロナの3年間でやっと落ち着きを見せようとしている。マスクがいつ外せるかと3年間、息苦しい中でも過ごしてきたが、やっと外せるとなったら花粉症や黄砂、今度は自然にマスクから離れられない状況になっている。
春陽展も今年は100回記念展を迎え、私自身も新しい区切りの年を迎えようとしている。これから少しずつコロナ前の生活に戻していきながら、更なる新しい試みを楽しんで描いていければいいなと思っている。



『先住者』

成實 久仁子 [神奈川県]

2023年春、3年間のトンネルが明けつつある。湘南地方にも多くの観光客が訪れ、コロナ前の賑わいが戻ってきた。経済的には喜ぶべきことではあるものの、緊急事態宣言下の誰もいない、海は確かに美しい色をしていたい、空は澄み渡っていた。ちょっとしたタイムスリップ気分になっていたものだ。ずっと大昔はより美しく、より恐ろしい海が広がっていたんだらうな。コロナが教えてくれた。